

手蔓からすぐ妻の死を考へ出して、もう一周忌になる頃だと云ふ事まで云つてくれたので、僕は氣にしてゐた實直さを悉く暴露しないで済んだのを有難く思つた。花束の事なんかは感心に噫にも見せなかつた。そこ迄はよかつたがそれからが難題だつた。「丁度いゝ所で遇つた。前からは是非遇つて話さう」と思つてゐたのだが、人傳でに聞くと君は獨身で通す氣ださうだね。而かもそんな事を衆人稠座の前で言明したさうだね。まあ黙つて聞き給へ」さう疊みかけて攻めよせて來た。實際を云ふと今日ばかりは僕は獨りで考へてゐたかつたんだ。妻の記憶は兎に角まだはつきり残つてゐたから。こんな日には——平凡な人間は月並みに命日とか何んとか因縁のつく場合に改つた心になる習慣が膠着してゐるのだから——思ひ存分感傷的になつて見たかつたのだが、友人の機嫌を損じてまで、それを押し通す非凡人の非常識は持ち合さなかつたのだ。「それは尤もだ。僕も自分の經驗から君の心持はよく理解が出来る。僕も妻を失つてから一年間はどんな事があつても再婚はしない覺悟をしてゐた。友人にも君が云つたやうに云ひふらした。全く君は僕のやつた事をその儘まねてゐるやうに見えるよ」尤もその友人は非凡な才人の通有性として女に近づく巧みさと女から尊敬愛慕される色々な資格を具備してゐたから、一つは實際の必要からも來た事ではあるが、藝者と云ふ階級の人達には大持てに持てゝゐた。その一點が僕とは全然違ふ。然し待つてくれ給へ、僕も妻が死んでから女の友達が出來たと云つたね。友人の場合には女の方がちやはやするのだし、僕は——僕の方から女性に心が牽かれてゐた、とするとこの點でも僕の方が上手かも知れないとその時も友人の前で思ひ返した。そして悉く恐縮した。所が君は自分の勝手ばかり

考へてはゐられないのだ。君には第一事業がある。世の中に出て思ふ存分活動して少しでも餘計人間の爲めに盡さうと思へばどうしても後顧の患を絶たなければならぬ。僕なんぞは一年間と云ふもの業務の一部分である交際から絶縁して、宴會に出られないのが一番困つた。子供を雇人の手に委ねて夜晝家を明けて置く事はとても出來ないからね」ところが幸なことには僕には定職がないんだ。僕は朝から晩まで家の内にのらくらして子供ばかり相手にしてゐる。母なんぞは自分だけとしては僕がかうやつて父の遺産を守つてゐるのが結句安心だと考へてゐるやうだが、親類などに遇つた時、新御主人はこの頃どちらへお勤めですなぞとやられると身を切るやうな思ひをするらしい。僕が外國にゐて一かど勉強をしてゐる積りの時、ある女と話をしてゐた序でに、何をしてゐる男と見ると聞いて見たら躊躇なくお前は Teacher だと云つてのけられた事がある。僕は平凡人だけに小さい時分から人の下積になつてこつと働く事はさう苦にならない質なのに、かう云はれる事は少し過ぎた次第だが、よく考へると僕が何んにもしないのは天才や非凡人が何んにもしないのとは趣がちがつて、何かする爲めに暫く何んにもしないのではない、天から何んにもしないのだ。母や兄弟が氣を揉んでくれるのも全く無理がない。然し彼等としても僕が今更ら何處かの屬官にでもなつて齟齬するのは品が悪いと思ふだらうから、このまま暫く無爲を通さうかとも思つてゐるのだ。唯人間の爲めに何んにもしないと云ふ非難は一番度膽にこたへて、飯を喰ふのも憚られる。全くすまない譯だ。一體皆んなは、どうすれば人間の爲めになるかと云ふ、僕なんかには一寸見當のつけやうもない問題を、感心によく辨へてゐると見えて、少しも不安な

げに仕事にいそしんでゐるのが羨ましい。然しこんな事が分らないのが僕の幸運な所以かも知れない。その代り子供の番は可なり忠實にやつてゐる。いつかトルストイの息子さんが日本に來た時有名な警句の名人が、トルストイの總ての創作の中で一番劣悪な創作はあの息子だと云つたさうだが、僕には創作と云つては子供三人の外にないのだから、……大變だ、もう平塚に汽車が着くから又その……(以下缺文)先刻は手紙に夢中になつてゐてもう少しで乗り越しをする所だつた。今停車場前の茶屋で上り列車を待ち合せてゐる間に又續けて書く。

病院の事を先きに書かうか、友人の話の續きにしようか。僕は病院の事を先きに君に書きたいが君としては話の聯絡が亂れて困ると思ふから、友人の話を書かう。「君は又年老いたお母さんの有る事を考へなければいけないね。僕の母などは割りに若くつてね、元氣はいゝししたが、一度はゆつくり京都大阪の方でも見物に連れて行かう行かうと思つてゐる中に、仕事が忙しくてそのままにしてゐると、突然腦溢血で亡くなつてしまつた。生みの苦勞をさせて、育てさせておまけに孫の世話まで焼かせて、樂もさせない中に死なしてしまつたのは實に痛恨に堪へない。是れも僕が早く再婚しなかつた罰だ」

「妻さへゐればどんなに忙しくつても家の事を委せておいて旅位はして來られたんだし、さう孫の世話ばかり見させないでも濟んだんだ。是れは特に注意するが、取り返しのつかない後悔をしないやうにしがへよ」僕は子供を持たない中から親子の關係を僕なりに解釋して一つの格言を作つてゐた。子供が生れた時に神興的に口を衝いて出てもすると生氣がつくだけけれども、そこは平凡人の悲しさで、是れも

理窟でこねあげた格言だからつまらないもんだが、然しそれを口外する事だけは、子供が生れて僕が親たるの資格を得た時にしようと思つて、胸の中に保留して置いた。子供が生れた。そこで僕は虎の子のやうにしてゐた格言を發表した。「子を持つて知る子の恩」と云ふのだ。何んだと君は思ふだらう。所が物好きな奴もあるもので、僕の弟に小説を商賣にしてゐるのがあつて、僕を小説の材料に使用した時、兄貴の言葉としてはこれ位を奇抜なものとして置くより仕方がないと思つたのだらう。その格言を文句の中に取り入れたもんだ。然るに或る都合で僕が校正を見てやる事になつたら「子を持つて知る親の恩」としてあつた。多分、植字の方で書き損じと思つたのだらう。僕は大切な格言が臺なしになつては大變だから、インキ赤々と親と云ふ字を抹殺して子の字に訂正して置いた。所がどうだ、雑誌が出て見ると、麗々と「子を持つて知る親の恩」と直つてゐるではないか。その時僕はつくづくと自分の平凡さが一面識もない植字工にまで知れ渡つてゐるのに驚かされた。僕がいかど功名顔をしてこの格言を父に云つて聞かしたら、父は澁い顔をして、そんな事を誰にでも彼にでも云ふものではない、人がお前を異を立て奇を好む男としてしまふぞとたしなめた。そこでこれから本題に這入るが僕にはとうから祖父と孫との關係について一つの格言が僕の胸の中に出來てゐるのだ。それは前に云つた親子關係の格言よりも少し平凡離れがしてゐると自信してゐる格言だ。是れは僕が祖父の資格を得たら發表すべきものだ。がこゝに一寸君の爲めに片鱗を見せるが、僕のその格言を標準にして友人の言葉を考へて見ると、どうも喰ひちがつた所が出來て來るのだ。非凡な彼の思想と平凡な僕のそれとの間に喰ひ違ひの出來るのは不思議

でも何んでもない。で僕はもう一度僕の格言を考へ直さうと思つた——植字工が自信をもつて僕のもう一つの格言を訂正してくれたやうに。何んと云つても彼は十目の見る所十指の指す所天下晴れて非凡な才能を持つて生れた人だ。僕は又誰にでも平凡な男と云ふ値ぶみをされる人間だ。だから、どうしてももう一度考へて見る必要がある。親がその子の不幸を共感する場合には自分の都合や、世の中の習俗や、周囲の顧慮などはまづ後廻しにして、その子の切實な哀愁をそのまま受け入れてやる事が、その子を一番喜ばし一番勵まし一番慰めるのだし、子は赤子でその親の心情に溺れこむ事が親を一番快くするものだ。と僕の思つてゐたのには訂正を加へねばならないさうだ。親は假令さうしてくれても、子の方では親の不自由を思ひやり、蛆が湧きはしないかと云ふ周囲の顧慮にも耳を傾け、君の所謂悲哀の中に浸り切る事なんぞはなるべく早く切り上げて、善後策を講ずるのが孝道にも叶ひ人道にも合ふやうだ。「さうか、そんなら君は必ずしも再婚を拒絶してゐるのではないんだね。何しろ僕は妻を亡くした友人に遇ふと先づ孤獨を守るなんて云ふ事は他人に公言するなと厳しく口どめするのだ。僕の周囲には随分澤山鰥夫が出来るが、再婚をしたもので後悔してゐるのは一人もないよ。世間には君の想像もしない程澤山女があるよ。僕が一つ立派な人を見つけて上げよう。もう櫻木町だね。ぢや失敬お母さんに宜しく」

僕はぼんやり取り残された。過重な大問題を裕に僕に恵んでくれて、同情深い僕の友人は重荷でも捨てたやうに、洋杖を振り廻しながら身も軽く列車を出て行つた。何しろ頭のめぐりが鈍いんだから、胃弱の男が山のやうな珍味の前に坐らされたやうに、暫く僕はうんざりして首垂れてしまつた。こんなに

物が解らないでは僕は是れからまあどうして世間を渡ればいゝんだらうと思つた。まあ何んでもいゝ手紙でも書けと思つて、それから夢中で君に手紙を書き出したんだ。

手紙を書くに云へば先刻上り列車が一つ通つたんだが、手紙に夢中になつてゐたから一汽車延ばす事にした。こんな下らない手紙一つ書くのに悠々と汽車まで延ばしてゐると聞いたら、世間の人は惘れて物が云へないだらう。實際自分でも少々自分を持って餘す次第だが、それにつけても幸福はかうしてゐないと來てはくれないものらしい。

そこで今度は病院の事を書く。松原を通ると村井弦齋さんの家が見えた。秋口から結核菌が腸についたので妻は下痢を始めた。ふと或る雑誌に弦齋さんの書いた記事で妻は胃腸の妙薬と云ふのを發見したんださうだ。それは楢の根の皮を煎じて飲むのださうだ。楢なら北海道に澤山ある。僕は早速手紙を僕の教へた學生の所に出して頼んでやつた。早速送つてよこしてくれた。學生の手紙によれば深い雪の中を山の奥に分け入つて、何尺も積つた雪を掘り起し、堅く凍つた土を割りくだいて採收したのだから、澤山あげられないのが残念だとしてあつた。澤山でないかと云ふのが両手では持ち切れない程あつた。僕は早速弦齋さんの所に行つてその用法を尋ねようとした。弦齋さんの所の書生さんは二三度けんんな顔をして弦齋さんと僕との間を取次いでくれたが、結局楢はたらの木の間違ひだと云ふ事が知れた。病院に歸つてから妻と大笑ひをした。所が今日弦齋さんの家を見ると、巨人のやうな古い楢の木の根元に蹲つてせつせと雪をかき分ける二人の學生の姿が、ぎら／＼光る八月の太陽の光の中ではつきり想像に上

つた。是れで先生の奥さんが治れば随分いゝなあ。そんな聲までが聞こえるやうに思つた。僕の心は急
にわく／＼し出した。そして涙が他愛もなく眼がしらににじんだ。
矢張り一年前の通りに病院の手前の洗濯屋では醫員や看護婦の白衣や帽子がふはりと風を孕んで、病
院の人達が舞踏でもやつてるやうに、魂もなく中有に整列して動いてゐた。あの時からすると醫員の太
多數は東京の本病院の人と交代して、見知り越しの顔は副院長があるばかりだつた。相變らず黒く瘦せ
てゐた。それがなつかしかつた。醫者には珍らしい挨拶の下手な口少なきこの人を妻は一番快く思つて
ゐた。僕はその人に花束の事を頼むと事務所を出て、妻の病所の所に行つて見た。その病所と云ふのは
八、六、三疊の三間から成る獨立の家屋で、少しの風にも習々と枝を鳴らす若い松林の間にあつた。庭
前の方から見ると患者が住まつてゐた。竹垣の傍には四寸程の丸石が昔の通りに立つてゐた。それは庭
に落ちて死んでゐた雀を妻が自分で葬つてやつたその墓石なのだ。看護婦や附添の人がじろ／＼僕を見
るので、僕はさう長い間その邊にゐる事が出来なかつたから、そのまゝ引き返して花壇の方に行つた。
眞夏の晝にこの邊を歩く患者は幸ひ一人もゐなかつたので、嘗て妻と散歩した時腰かけた藤棚の下のべ
ンチに足を休めた。そこで僕は熱い涙を零したと君は思ふだらう。所が僕は碌な考へ事もせず、忙しく
歩き廻りもしない癖に、何んだか、どうしていゝのか分らない程だる／＼つてぐつすり寝込んでしまつた。
全く以て平凡人には不似合な所作だと君は思ふだらうが、それは君が自然のはたらきを恐らくは理解し
てゐない事からさう思ふのかも知れない。哀愁が極まると人は夢も見ない熟眠に陥るものだ。それは自

然が人知れずする慈善の一つだ。で、僕が眼りに落ちたと云ふ事は、結局、僕がどれ程平凡人らしく愛
する妻を悲しんでゐたかの證據になる譯だ。
ふと眼を覺ました時は、總てのものが活々と日に輝いたこの見慣れた景色を、却つて夢ではないかと
驚いた位だつた。いぎたなく寝たと見えて、涎が衣物の肩の所を圓く滲してゐた。氣味悪く流れ出た油
汗をハンケチで拭くとやつと人心地がついた。喉がひどく乾く外には、何と云つて望ましいものもない
位僕は飽き足つてゐた。

眼の前の白砂の上には女物らしいゴム草履の跡が、靜かに人の歩いて行つた形をそのままに語つてゐ
た。それは妻の足跡ではないかと思ふほどそこいらは舊の通りだつた。ところが妻と云ふ一人の女は二
度と顔出しの出来ぬやうに、「死」と云ふ奴がこの地上から綺麗にこそぎ取つてしまつたのだ。そんな事
を考へると彼奴の悪戯が一寸ほゝゑましくなる。やがては彼奴が、腐つた手拭のやうな香のする古雑巾
で、生存の意義も知らず、人類の爲めにも役に立たず、一身の處理すら出来ない僕と云ふ男を、穢ない
染斑だと云はんばかりな濼い顔をして丹念に拭き取つてしまふ時が来るのだ。それは間違ひのない事だ。
僕は勝手に色んな虚言をつきもしたし又是れからだつてつきもしようが、この事はばかりは何んと云つて
も虚言にしようがないんだ。どんな大筒棒な虚言つきでも、一生に一度は本當を云はないではゐられな
いのだ。それは死ぬと云ふ事だ。この正直一つで大概な虚言までは寛大に見てやつてもいゝやうな氣が
僕はする。こんな我儘な僕が同時に非凡人だつたら——そんな事はあり得よう筈はないが、論理上、假

定的前提はどう作つても構はないのだから——歴史にさへ不朽の功業とか、不滅の名聲とかを残して世間迷惑な事にもならうが、僕にはそんな事は大丈夫ないのだから、暫くの間小さくなつて人間社會の片隅にゐる位の事は許して貰つてもいいと思ふのだ。

一體非凡な人達が兎角幸福を感じないのはこの「死」と云ふ奴に何んとか打ち勝たうとするからではないのだらうか。ところが僕となると愛する妻を彼奴に奪はれながらあまり不幸さうな顔をしてゐないのはどう云ふ譯だ。僕はこの手紙の始めで幸運な筈の男だと書いたが、而してその幸運から幸福が生れると書いたが、考へて見ると幸運と幸福とは道伴れぢやない。現在妻が死ぬ二年程前に、或る友人が占ひを見て貰つてくれたが、それには、明かに妻は三度娶れば三度とも死ぬと書いてあつた。兄弟喧嘩で近親とは離れぬことになると思つてあつた。事業をすれば衆人の親分になるやうな事業をして一時は成功するが、人望をつなぐ事が出来ないで失敗してしまふとも書いてあつた。尤も、その占ひには生年月日時間を書き込んで頼まなければならぬのだが、僕の生れた時間が判然しないので、或は僕より少し早くかおそく生れた人の卦が出てゐるのかも判らない。三人死ぬと云はれた妻の一人が死んだ事だけは的中してゐる。もしこの占ひが幼年時代のそれを凌いで正確なものだとすると、僕はあんまり幸運な男だとは云へさうもない。然るに君が僕を不幸ではあり得ない男だと思つてゐる通りに、僕は中々幸福を感じてゐる。妻を失つてもその爲めに悶死したり再婚などは思ひもよらないと思ふ程不幸ではない。是れは多分死と云ふ奴が萬事の形をつけてくれると高を括る平凡な見方から出てゐるに違ひない。こんな事を

云ふと靈魂不滅論者などは何んと思ふしみたれた根性の男だらうと僕を悪むよりも憫殺したくなるだらう。基督教徒などは、あんな人生觀とも云へない人生觀にたよつて生きようとするのだから平凡に終るのも尤もだ。可哀さうな男もあつたものだ。高い所から同情を垂れてくれるに違ひない。所が僕の知つてゐる範圍で云ふと、基督教徒程再婚を手取早くする連中はないやうだが、あれは一體どうしたものだらう。男女戀愛の神聖を主張した本元は基督教だと思ふ事だし、靈魂不滅殊に地上生活で鍛錬を受けた人格を持つたまゝの靈魂不滅を唱道するのは固より基督教だが、再婚した人が死んで後、あの世で二人の細君に出喰はしたらどうする積りだらう。その男は戀愛神聖論者だから前の妻に對しても、後の妻に對しても、心からの愛を感じてゐるのでなければ、夫婦になつた筈がない。一方の妻が極樂にをり一方の妻が地獄にでもゐてその男が片方の妻だけに遇へるなら、別條はないが、基督教徒の事だから大抵は皆んな極樂に行くだらう。さうなると問題が大分紛糾して来る。あの世では一夫多妻が許されるのであるらうか。さうでないとするとその男は二人の中の一人を選んで一夫一婦の愛情を繼續する事になるのだらうか。或は地上に於て人格發揮鍛錬の唯一の壇場と云つてもいい親子、兄弟、朋友、夫婦などの愛情は撥無されてしまふのだらうか。さうなつては靈魂に人格や個性を結び付けて考へる事が出来るもんだらうか。基督教徒は勿論それ等の事には解決がついてゐて、實行をしてゐる事だらうから別に妙な氣もしまいが、僕が若し今の通り平凡なまゝであんな信仰を持たせられたら、苦しくつて再婚は戯談にも出來ないやうな氣がするよ。そこに行くに僕の方は死と云ふもので覺がつくのだから大いに呑氣なものだ。

有島武耶全集

その爲めに僕は割合幸福なんだと獨りできめてゐる。

そら次ぎの汽車がもう来る。今度はさすがに僕も乗りおくれではゐられない。

汽車に乗つてから思ひ出したから書き添へる。一體何んだつて寒暄かんげんの挨拶もせず健康も尋ねず、こんな放圖はうちずもない事を長々と書いてよこしたのだと君は訝いぶかるだらう。それは一年もたつと君までが或は再婚を勧めてくれはしないかと思ふからだ。そのお志は實に有難い。僕は再婚しないと云ふのではない。唯もう少し考へさせてくれ給へ、結婚したくなつたらこつちから申出るからそれまで待つてゐてくれ給へ。僕のやうに平凡な點からのみ幸福を見出してゐる人間は、眞似にも非凡人のしたやうな事をするを取り返しのつかない怪我になるから、自分が自分の尺度を探し出すまで永い眼で見てもてくれ給へ。さう云ひたいまでだつたのだ。さうしたら、頭が悪いもんだから大いに脱線してしまつたのだ。然し脱線しない位なら僕は天からこんな平凡な事は書きはしない。書かずに置いては僕の用が足りなくなる。判わかるか。では左様なら。

(一九一七年七月、新潮所載)

二五
二五
二五

昭和九年七月廿七日印刷
昭和九年七月十日發行

印 檢



春陽堂文庫 百十一

〔宣告外四篇〕

定價 金貳拾五錢

著 者 有 島 武 郎

發 行 者 和 田 利 彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印 刷 者 木 呂 子 斗 鬼 次
東京市日本橋區通三丁目八番地

印 刷 所 日 東 印 刷 株 式 會 社
東京市本郷區眞砂町三十六番地

發 行 所

東京・日本橋・通三丁目
振替・東京一六一七番

春 陽 堂

電話日本橋 五一番 六四一番

春陽堂文庫既刊書目

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
金色夜叉	藤村詩集	新生第二卷	新生第一卷	それから	相互扶助論	河内山と直侍	三人吉三	村井長庵	倫敦塔・その他	三郎	草枕	土	坊つちやん	虞美人草	瀧口入道
尾崎紅葉	島崎藤村	島崎藤村	島崎藤村	夏目漱石	大目漱石	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	長塚節	夏目漱石	夏目漱石	高山樗牛
五八	五八	三五	三五	三三	三三	四〇	三三	三三	二二	三三	二二	二二	四〇	二二	二二

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
近代の小説	松蘿玉液	多情恨	卍 (まんじ)	春服	三人	嵐・分	硝子戸の中	片戀・外六篇	に・ごりえ	彼岸過迄	朝鮮	滿韓とくろく	長塚節歌集	邪宗門	門	照葉狂言
田山花袋	正岡子規	尾崎紅葉	谷崎潤一郎	芥川龍之介	尾崎紅葉	島崎藤村	夏目漱石	二葉亭四迷	樋口一葉	夏目漱石	高濱虚子	夏目漱石	長塚節	芥川龍之介	夏目漱石	泉鏡花
三六	二五	六〇	四四	六〇	六〇	二五	二五	三三	三三	四〇	六〇	三三	三三	六〇	二五	二二

春陽堂文庫新刊書目

81	小鳥の巢	鈴木三重吉	¥ .35
82	日和下駄 附江戸藝術論	永井荷風	¥ .30
83	輪廻前篇	森田草平	¥ .35
84	輪廻後篇	森田草平	¥ .35
85	神の如く弱し外二篇	菊池寛	¥ .25
86	露芝・寂しければ	久保田万太郎	¥ .30
87	大阪	水上瀧太郎	¥ .35
88	大阪の宿	水上瀧太郎	¥ .30
89	湯島詣	泉鏡花	近刊
90	通夜物語	泉鏡花	¥ .15
91	人生の幸福外六篇	正宗白鳥	¥ .35
92	渦巻	上田敏	近刊
93	竹澤先生と云ふ人	長興善郎	¥ .50
94	吾が俳諧	久保田万太郎	¥ .20
95	臺灣紀行	佐藤春夫	近刊
96	湖南の扇	芥川龍之介	¥ .20

東京春陽堂發兌

終